

NPO 森からつづく道 平成 25 年度事業報告

I. 概要

平成 25 年度は当団体にとって初年度であったが、企画提案した 3 件の事業を受託し運営することができたため、充実した活動となった。事業の実施にあたっては、多くの会員の参加・協力を得ることができた。

自主事業としては、自然科学に関する調査・研究成果や自然の保全に関する課題を一般の人と共有し、気軽に意見交換できる機会を作り、生物多様性の保全に対する理解と関心を醸成するために、サイエンスカフェ★えひめと観察会を実施した。また、伊予銀行の『エバーグリーン』助成を獲得し、生物多様性保全のための事業を、しまなみ地域を中心に展開する体制を整えることができた。

なお、当年度に計画していた「里地保全協働事業」（環境省・地域活性化を伴う環境保全活動の協働取組推進事業）は、企画申請をしたものの、採択されなかったため、実施に至らなかった。

●愛媛県からの委託事業

- 1 生きもんマスター事業（県民参加生きもの調査事業）
- 2 織田が浜保全事業（保護管理組織活動支援事業）
- 3 自然観察指導員講習会

●自主事業

- 4 サイエンスカフェ★えひめ
- 5 観察会
- 6 伊予銀行の助成金・エバーグリーン事業
（H25 年度に採択。本格実施は H26 年度）

II. 各事業報告

1. 県民参加生き物調査事業（生きもんマスター事業）

だれもが身近な生き物に親しみ、生き物たちの生息環境に関心を持つきっかけとなるツールを開発。エントリーは 4 月末時点で 800 人を超えた。H26 年度も継続。

- ・愛媛県地域連携・提案型雇用創出事業→スタッフ 1 人を雇用
- ・事業規模：289 万円（委託事業収入より）

【目的】

県内の自然環境を将来にわたり守り引き継ぐには、自然の大切さと保全に対する理解を

広く県民に浸透させる必要があり、県民が身近な自然環境に対する関心を高めることがもつとも重要となるが、教育機関・家庭などを巻き込で実施する全県的一斉生物調査が効果的である。この事業を通して、県の推進する生物多様性の普及啓発にも大きく寄与するとともに、調査結果を今後の県内の自然保全対策の基礎資料とすることができる。

【成果】

- ・子どもからお年寄りまで、だれもが参加できる全県的一斉生物調査となるよう、大学生メンバーの提案を得て工夫することができた。
- ・個人が参加しやすいように、申込書付きのチラシを作成し、エントリー方式とした。さらに、各市町の教育委員会を經由して県内の全小中学校および自然観察や保全を実践している団体や主要な緑の少年団をもつ小中学校に案内を送付し、参加を呼びかけた。
- ・年間を通して生き物の生態について関心を持てるよう、季節ごとに調査対象を設定した。参加者は 26 年 11 月まで、継続して生き物調査を行うシステムである。
- ・冬号の参加者からの調査報告を 3 月末まで受け付け、集計して調査対象とした 15 種類の生き物について、発見数・場所・時期などの分析を行う予定で、今後の県内の自然保全対策の基礎資料なることが期待できる。
- ・家族で参加している場合も多く、家族単位で自然と生き物に関する話題ができ、自然と共生する意識が醸成されることが期待できる。調査対象とした生き物を探す過程で、その生き物がどんな環境に生息するのか、その時期にどのような活動をしているかなど、参加者が科学的なアプローチを身に付けることが想定される。
- ・冬号の参加者からは、「対象の生き物を探して、葉を落とした木の樹皮や枝をじっくりと観察する機会になった」、「対象の生き物以外にも面白い生き物を見つけた」などの感想が複数寄せられ、観察の魅力を体感し、生き物に対する関心の高まりがうかがえた。

【事業実施内容】

◆調査の設計

- ・参加対象は子どもからお年寄りまで制限は設けず広く募ることとしたが、小学校 5 年生が理科で身近な生き物について学ぶため、小 5 の子どもが関心を持つことができるように意識して設計し、親しみをもてるようにプロジェクト名を「めざせ！生きもんマスター！」とした。
- ・申込みはチラシを切り取って投函する方法と、メールでの申込みも可能とした。
- ・年間を通して、季節の変遷とともに出合う生き物が変わってくることに敏感になり、生き物の生態に関心を持てるように、3 ヶ月毎に調査対象とする生き物を設定し、冬号・春号・夏号・秋号を制作することとした。
- ・調査対象の生き物は、各号ごとに 15 種類を植物・昆虫・両生類・鳥類等から選定し、公園や庭から、田畑や農地、河川や山林などで出合えるものまで、広く設定した。
- ・調査対象の生き物は、見つけやすいものから難しいものまで、初級・中級・上級の 3 段階に設定し、得点をそれぞれ 1・2・3 ポイントとして、発見が難しい生き物探し

をゲーム感覚でチャレンジできるように工夫した。さらに、10ポイント獲得して報告すると、認定証がもらえるように設計した。

・調査対象の生き物の選定にあたっては、植物・昆虫・両生類を研究している専門家や学生の参加を得て検討した。

◆チラシの作成・配布

・調査の目的と方法、参加申し込み書を掲載したチラシを制作し、エントリー方式とした。15,000部を印刷し、教育委員会経由で県下のすべての小中学校に配布した。さらに、公共施設や自然観察や保全を実践している団体に依頼し、施設への設置やイベントでの配布を依頼した。

◆冬号（平成25年12月・26年1月・2月）の制作、発送

調査対象とした生き物は次のとおりである。

【初級】 ナノハナ、スイセンの花、ウメの花、ツバキの花、ロゼット型の葉

【中級】 ジョウビタキ、メジロ、ミノムシ、カマキリの卵、葉痕

【上級】 イラガのまゆ、モズのはやにえ、ヒレンジャク、冬のカ、アカガエルの卵

エントリーした人に調査を行ってもらうため、次の①～③を制作し、送付した。

① 「生きもんカレンダー」

調査対象とする15種類の生き物の写真を掲載。カレンダー部分には、季節の行事や祭り・二十四節気・満月／新月の情報に加え、初雪や椿が咲くころなどの生物季節に関する情報を盛り込んだ。さらに、参加者が見つけた生き物を書き込めるようにスペースを設けた。

② 調査対象の生き物「解説カード」

A4両面カラー2枚に、調査対象とする15種類の生き物について、表面に写真、裏面にその生き物の分類・大きさ・見つけやすい場所・解説文を掲載し、切り取ってカードとして携帯できるように工夫した。また、子どもが読めるように漢字にフリガナを加えた。

③ 報告はがき

見つけた生き物について、見つけた日・場所を報告するはがきを制作した。

◆冬号認定証の制作

調査にエントリーし、冬号の生き物探しで10ポイント以上の報告をした人に授与する「ウインターマスター認定証」を制作した。クレジットカードの大きさに、冬鳥なのであるオシドリの写真を掲載し、裏面に取得者の名前の記入欄とオシドリの解説を掲載した。認定者へは春号に同封するなどして送付した。

◆春号（平成26年3月・4月・5月）の制作

調査対象とした生き物は次のとおりである。

【初級】 ウグイスの鳴き声、ツバメ、アゲハチョウ成虫、オオイヌノフグリ、ツクシ

【中級】 ナナホシテントウでないテントウムシ、シャクトリムシ、四葉のクローバー、

ネジバナ、ツマグロヒョウモンの幼虫
【上級】黄色のニホントカゲ、ホオジロ、ツマキチョウ、クビキリギス（声もOK）、
ニホントカゲ

2. 織田が浜保護管理事業

織田が浜のウンラン、ハマビシのモニタリングを実施。故意ではないが、人為による減少の危険が高いため、生態の解明とともに、生育環境を含めた保全対策が急務。H26年度も継続実施。

- ・愛媛県保護管理組織活動支援事業
- ・事業規模：30万円（委託事業収入より）

【目的】

今治市織田ヶ浜に生育する特定希少野生植物ハマビシは、海水浴客等海浜利用者による踏み付け被害が懸念され、ウンランも作業車による圧搾やゴミの投棄により消滅の危機に瀕している。また両種とも波浪や漂着ゴミなどによる生育阻害も懸念されている一方、保全に必要な両種の生態学的知見も充分でない。そこで、両種の生育状況調査を行い、生育状況を把握することによって、保全の具体案の策定に寄与する。

【成果】

1. ハマビシの移動動態を把握し、保全の基礎資料および既存の保護区の設定を再検討する資料が得られた。
2. ウンランの生育調査により、保全の基礎資料を獲得することを想定していたが、踏み荒らしなどにより損傷が進んだため、モニタリングによる生育の情報については、多くは得られなかったが、冬場も常緑で残ることは確認できた。保全のために、緊急的な保護柵を設置した。
3. ウンランの生育阻害要因としてハマゴウによる被圧が考えられたが、作業車の圧搾に合い、ハマゴウの損傷が著しい状況を確認。ハマゴウ群落とウンランの関係について、継続してモニタリングが必要との方針を得た。
4. ウンランについては高波などにより壊滅する危険もあるので、個体数の確保ができれば、織田ヶ浜において移植などにより消失の危険性を軽減することや、夏場の寒冷紗の設置の検討が必要との対策を検討することができた。
5. 織田ヶ浜の植物のゾーネーション、ハマビシ・ウンランの希少性および、海浜にすむ昆虫について、勉強会：サイエンスカフェ★えひめを開催し、関心と保全意識を醸成することができた。

【事業実施内容】

1. ハマビシの株が年々移動していることから、ハマビシの生育株の精密測量により分布図を作成した。
2. ウンランの株の精密測量により分布図を作成予定であったが、1月末時点で2～3株の生育株しか確認できなかったため、次年度は周辺で新たな株の発生が無いかを注視することとした。
3. ウンランの生育を阻害しているハマゴウやテリハノイバラの間引きを検討していたが、作業車の圧搾により、ハマゴウ・テリハノイバラ群落は損傷が激しかったため間引きは行わず、次年度以降はウンランとハマゴウ・テリハノイバラ群落の関係性の把握に努めることとした。
4. ハマビシ・ウンランの生育状況のモニタリングを7回にわたり実施した。
5. 調査による現状を踏まえ、ハマビシ・ウンランの持続的な保全案を作成した。
6. 織田ヶ浜全域および周辺海浜の植物相調査を実施した。
7. ハマビシ・ウンランを中心とした勉強会を実施した。

3. 自然観察指導員講習会

17年ぶりの愛媛県開催とあって、県内を中心に64人が受講。自然に親しむ機会づくりに取り組む人材のスキルアップや後押し、相互の刺激などの機会となった。

・愛媛県と日本自然保護協会（NACS-J）が開催した自然観察指導員講習会の運営を、地元受け入れ団体として支援。

・事業規模：129千円（委託事業収入より。大半はテキスト代の補助に充当）。

【目的】

自然観察指導員講習会の受講者募集・準備・当日運営を愛媛県自然保護課とともに担い、円滑に講習会を実施する。

【事業実施内容】

愛媛県自然保護課およびNACS-Jと連携して、次の業務を実施した。

（1）講習会の運営

・当日（平成25年11月16日）は会場に8：00に集合し、受付ならびに会場設営、案内表示設置、参加者誘導を行った。

・運営においては、事前に作成した役割分担に従い、実習の補助、参加者の誘導、書籍販売、懇親会の運営等を行った。

（2）講習会の準備

・受講申込みを受け付け、愛媛県自然保護課に情報を集約させた。さらに同課およびNACS-Jと連携して受講の手引きを作成し、受講手続のサポートを行った。

- ・実習に使用する教材をNACS-Jから購入し、当日参加者に提供した。
- ・県内で自然観察会の運営等の実績のある人を実習講師として推薦し、参加の可否について連絡を行った。
- ・9月21日に、会場となる国民休暇村東予において、NACS-J担当者小林氏、愛媛県自然保護課重川氏、休暇村東予担当者磯邊氏とともに、当団体の松井・小澤・黒河が下見を行い、講習会実施要領を確認して、準備と役割分担について打ち合わせを行った。講習会前日には、小澤がNACS-J講師を迎えて下見のために現地を案内した。

(3) 受講者の募集

- ・関係各所にチラシを手渡し・配布して関心ある層への勧誘を行ったほか、関係機関のメルマガ等を活用して募集情報を発信した。さらに当団体の会員に呼びかけたほか、HPにもチラシを掲載して周知に努めた。結果、当団体の学生会員をはじめ、多くの関係者の参加を得た。

4. サイエンスカフェ★えひめ

多様なテーマで開催。自然に関する幅広い知見を得る機会となり、生き物の生態や調査方法、生物多様性の保全の課題などについて、意見交換することができた。継続して開催し認知度を高めること、および講師謝金の確保が課題。

- ・事業規模：23千円（参加費収入、自主財源より）
- ・偶数月の第3火曜日、19:00～20:30、愛媛大学にて実施（変更あり）
- ・参加者数は各回平均20人。参加費は200円。

【目的】

専門家が調査・研究で得た最新の話題を提供することにより、自然の魅力や希少さの理解を促進し、生物多様性の保全への関心と自然と共生するための暮らしの実践を喚起する。

【事業実施内容】

開催日	テーマ	内容	話題提供者
第1回 7月27日 (土)	お城の生物多様性対決！2013年夏の陣	松山城の築城から現在に至る植生の変遷、海水の堀など多様な環境を持つ今治城の生き物に着目。人と自然が生み出した生物多様性を紹介した。	松井宏光氏、小澤潤氏(当会代表および副代表、愛媛植物研究会)
第2回 10月15日 (火)	ニホンジカとの共生を探る	近年シカの食害が顕著になり、対策が急務となっている。調査を実施している専門家による現状報告	宮本大右氏(ネイチャー企画)、松井宏光氏

		と生態の解説とともに、人との歴史的な関係性の変遷、対策について意見交換を行った。	
第3回 12月17日 (火)	波打ち際に広がる宇宙	今治市の織田が浜について、多様な海浜植物のゾーニングが残された希少な環境であることや瀬戸内性のウンランを解説。さらに海岸の昆虫と調査の現場が報告され、厳しい環境に適合した多様な生き物が生息していることを紹介。清掃活動の在り方を問題提起した。	小澤潤氏、武智礼央氏（当会会員、日本半翅類学会）
第4回 2月18日 (火)	地の果て南極で地衣類を探す！	南極観測隊夏隊として、南極に滞在した経験を紹介。調査対象である地衣類について、生物の多様性には乏しい環境で、地道に繁栄している様子が報告された。参加者からの質問に回答する形式で、南極の実際の姿を共有していった。同地における生活の工夫についても質問が多く寄せられ、調査隊に対する理解が深まった。	川又明德氏（第54次南極観測隊夏隊、県総合科学博物館専門学芸員）

5. 観察会・フィールドワーク

主に会員を対象に観察会の機会を設けたところ、植物や昆虫など複数分野の専門家がいることにより、相互に気付きが多く、深まりのある観察会となった。

●6月1日（土）内子町石畳地区における野外観察、ホタルの観察会

雨天のため、登山を予定していた牛ノ峯へは車で移動し、数カ所で下車して自然観察を行った。「石畳の宿」で山菜などの地元料理の後、武智礼央氏からホタルの種類と生態、生育環境について講義を受け、車でホタルスポットに移動し、ホタルを観察した。

●8月31日（土）面河山岳博物館「抜け殻展」

台風による荒天が予想されたため、面河溪谷周辺での自然観察は中止。博物館の企画展「抜け殻展」を観覧した。

- ・当初、関心のある一般の方々を対象に観察会を開催することを想定していたが、告知、交通手段の確保、保険、下見、予算、天候への対応など、クリアすべき課題が多いため、会員と会員が誘った人を対象にする方向が現実的である。
- ・参加者の満足度は高く、要望もあるため、会員からの提案があれば、実現できるように注力していきたい。

Ⅲ. 組織運営

1. 意思決定

- ・事業の企画・運営については、松井・小澤・黒河が必要に応じて打ち合わせを行った。アイデアや情報が必要な場面では、会員に適宜協力を求めた。
- ・企画・運営に関しては、定期的な会議の開催も必要と考えられ、今後組織体制と併せて検討を要する。
- ・生きもんマスター事業の企画検討、織田が浜事業の調査、サイエンスカフェの講師および参加など、会員の参加・活躍の場を創ることができた。次年度も同様の方針で取り組み、タイムリーに参加を促す告知を行っていく。

2. HP、ブログ

- ・村上智一氏、渡辺奈央氏の尽力により、HP を開設し、随時内容を更新した。また、「もりみちブログ」では日々出合った生き物などの話題、サイエンスカフェの実施報告などの情報をアップした。
- ・HP およびブログへのアクセスを高めるための工夫が必要。
- ・HP の更新を事務局が担当できるように、態勢を整える必要がある。

以上